

平成 8 年 7 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859)

ヌエの声

鳥の囀りというと、普通、明るくてさわやかというイメージがある。これは、恋の気分さえもつながるものだ。ところが、そういう生き生きとしたイメージには縁遠い泣き声もある。

トラツグミという鳥がいる。大きさはハトぐらい。黄色と黒のだんだら模様で、目が大きくおっとりした感じの鳥である。ミミズが好物で、よく地上でエサを探しているのだが、体の模様が落ち葉とまぎらわしく、あまり目立たない。目立つのはその鳴き声で、低い口笛のような声で鳴くので、余計、変に目立つ。鳥の声だと知らなければ、その不気味さに不安を覚えたとしても無理はない。

昔、近衛天皇（在位 1141～1151 年）が、夜な夜な紫宸殿の屋根の上から聞こえてくる不気味な声に悩まされ、ついにノイローゼになった。ある夜、源三位頼政が謎の声に向かい矢を放つと、見事に手応えがあり、頭はサル、体はタヌキ、尾はヘビ、手足はトラで、声はトラツグミに似た、ヌエという化物が落ちてきた、という有名な話が平家物語にある。だから、トラツグミがヌエと呼ばれ、黄色と黒の模様のためか、オニツグミといわれることもある。この声の不気味さは、あちこちでそう受け取られていたらしく、ヌエ（トラツグミ）が鳴くと「人が死ぬ」とか「火事が出る」とか言う言い伝えがたくさん知られている。もう大分前だが、「ヌエの鳴く夜は恐ろしい」という映画のキャッチコピーが流行ったこともあった。

青梅周辺では、一年中生息していて、まだ姿を見ることも、鳴き声を聞くこともできる。しかし、最近、確かに数が減った。いぜんは青梅市新町にある自宅で、夜、部屋の中において、どこからともなく聞こえてくるその声に耳を澄ますこともできた。それが、今ではもう滅多に聞くことはない。姿を見るなら、冬がよい。丘陵地帯の雑木林や谷戸田を探すと、ひょっこり姿を現すことがある。姿を見ると、何でこの鳥がああ声で鳴くのか、と思うようなおとなしげな鳥である。

夜、あるいは薄暗い時に鳴く声には、トラツグミほどではなくとも、何がしかの不気味さを感じることもある。ゴイサギ、ササゴイ、ミゾゴイ、フクロウの仲間にしろ、皆そうだ。これらの鳥は、生活環境が悪くなると、確実に姿を消す。すると、それらの声に伴う不気味さという感情も希薄になる。そして、その不気味さを形にする想像力も減退していきそうな気がする。

鳥の数が減るのもさることながら、そういった想像力が失われるのも寂しいことのような気がする。

*青梅市郷土博物館の催し

現在、青梅市郷土博物館では市内の地形、地質や身近にみられる動・植物を紹介しました、**特別展『多摩川とその流域の自然－青梅市－』**を10月10日まで開催しています。

ぜひ、御覧ください。また、**特別展『多摩川とその流域の自然－青梅市－』**の図録を700円で頒布しています。

月曜日休館（9月23日（祝）開館、24日（火）は休館） 入館無料

（文責 桜岡）